「日女御前御返事」

尊き同志を信頼しあおう

（御書全集一二四七ページ九行目～同ページ十一行目
編年体御書一一〇四ページ一行目～同ページ三行目）

法華経をば経のごとく持つ人人も・法華経の行者を或は貪瞋癡により或は世間の事により或は・しなじなのふるまひによって憎む人あり、此は法華経を信ずれども信ずる功徳なしかへりて罰をかほるなり

この御文の意味するところは、別しては当然、日蓮大聖人のお立場を述べられております。しかし総じては、末法の慈折広布に邁進する日蓮大聖人門下にあてはまる御文と自覚して拝せるのであります。

法華経とは、末法の法華経、すなわち御本尊であります。「法華経をば経のごとく持つ人人も」と

は、御本尊を受持している人々のすべてに共通いたします。たとえ、そういう「法華経をば経のごとく持つ人人も」、それはかたちのうえのみで、実際は、もし「法華経の行者」――別しては、御本仏日蓮大聖人お一人であられる。また総じては、日蓮大聖人の門下、すなわち正法をたもって広宣流布に向かって、日夜、真剣に活動している人――を憎んだり、謗る者には、功徳がないばかりか、かえって罰を受けてしまうという御金言なのであります。

それでは、どういうかたちをとって誹謗中傷が行われるか、それを大聖人は、一つは謗る人の「貪瞋癡」によって、二つには「世間の事」に事寄せて、三つには仏法実践者の「しなじなのふるまひ」をとおしてである、とおおせなのであります。

「貪瞋癡」によって憎むというのは、その人の貪り、瞋り、癡か――すなわち、その人の心の魔性の発露ともいえるであろう煩悩が原因で、法華経の行者を憎んでしまうことであります。

この貪り、瞋り、癡かというものほど、やっかいなものはない。人間のもつ悲しむべき性であります。しかし、怨嫉、怨念、憎しみというものに振り回されるか、信心という仏界から自分の生命を律していけるか、ここに絶えざる人間革命の戦いがあることを知ってください。

当然、荒凡夫の未熟さのゆえに、さまざまなことがあるかもしれない。私たちの側でそうさせない努力も、当然必要であります。しかし、故意に尊き〝仏子〟を傷つけていくことは、じつは、みずからの生命をも傷つけていく醜い行為であり、みずからを奈落の底に追いやっていくことは疑いない。

また「世間の事」によって憎むというのは、仏法の厳然たる教義によらず、世間的なことに事寄せ

て批判したり、憎しみをいだく場合であります。たとえば、地位とか、立場とか、財産とか、いわゆる世間的な姿のうえから批判することであります。地位や権威をカサにきて驕りたかぶり、法華経の行者を誹謗することも含まれてくるわけであります。

さらに「しなじなのふるまひ」によって憎むというのは、その人の振る舞いや言動、すなわち、表面に現れた姿、形で批判する場合であります。

いままでも難というものは、かならず世間のこと、生活的な事象に事寄せて起きてきました。大聖人の時代もそうでした。いまた同じであるといえます。

これらは、いずれも、人間がもっとも陥りやすい通弊でもあります。それだけに、みずからの仏道修行の鏡としていくべき重要な戒めとも拝すべきなのであります。

とともに、世間的なことに事寄せたり、表面の振る舞いや言動によって人々は見ていくのでありますから、自身の社会における姿や地域における行動も〝さすが〟といわれる人になっていくことが大切です。しかし、それでもなおかつ経文、御書に照らし、かならず非難中傷は内外ともにあると考えなくてはならない。

ともかく日蓮大聖人は、結果的に法華経の行者を憎むということは、いかに法華経を経のごとくたもっているかにみえても、そのような姿には信心の功徳はない、かえって罰を受けてしまうのである、と断言されているのであります。

日蓮大聖人の偉大な仏法をみずからも行じ、この末法に弘通している人を誹謗すれば、かならずこ

うなるとの厳しき御聖訓なのであります。

同志というものは、互いに信頼し、尊敬しあわなければならない。自他彼此の心で、互いに反目したり、怨嫉したり、憎しみあったりすれば、もはや仏法の命脈は、そこには息づいていないことになります。むしろ、生命の魔性に汚染された世界をつくりあげてしまうのであります。

ともあれ、亀裂化し、断絶化した社会にあって、ひたすら御本尊を受持、唱題まいらせて、互いに「信」で結びあった教団は、この世で比類なきものと信じます。

「佐渡御書」に「悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を破るべし師子身中の虫の師子を食む等云云、大果報の人をば他の敵やぶりがたし親しみより破るべし」（御書全集九五七ページ）の御金言の鉄則を銘記していきたい。ゆえに内部から破壊していこうとする行為は、最大の仏敵となる所業なのであります。

とくに、これからの時代は、日本的にも、世界的にも、内部充実の時代となるであろうと思われます。世間にも「艱難にあいて、はじめて親友を知る」とのことわざもあります。いわんや〝異体同心〟が、仏法の真髄であります。ゆえに、真実に、広宣流布に苦難を共有しながら活動していくなかに、なにものにもかえがたい強靱な絆は築かれるにちがいありません。

一人ひとりが己の信心を確立しつつ、仲良くスクラムを組んで、地涌の菩薩の眷属として誉れの道を、ともどもに進んでまいろうではありませんか。